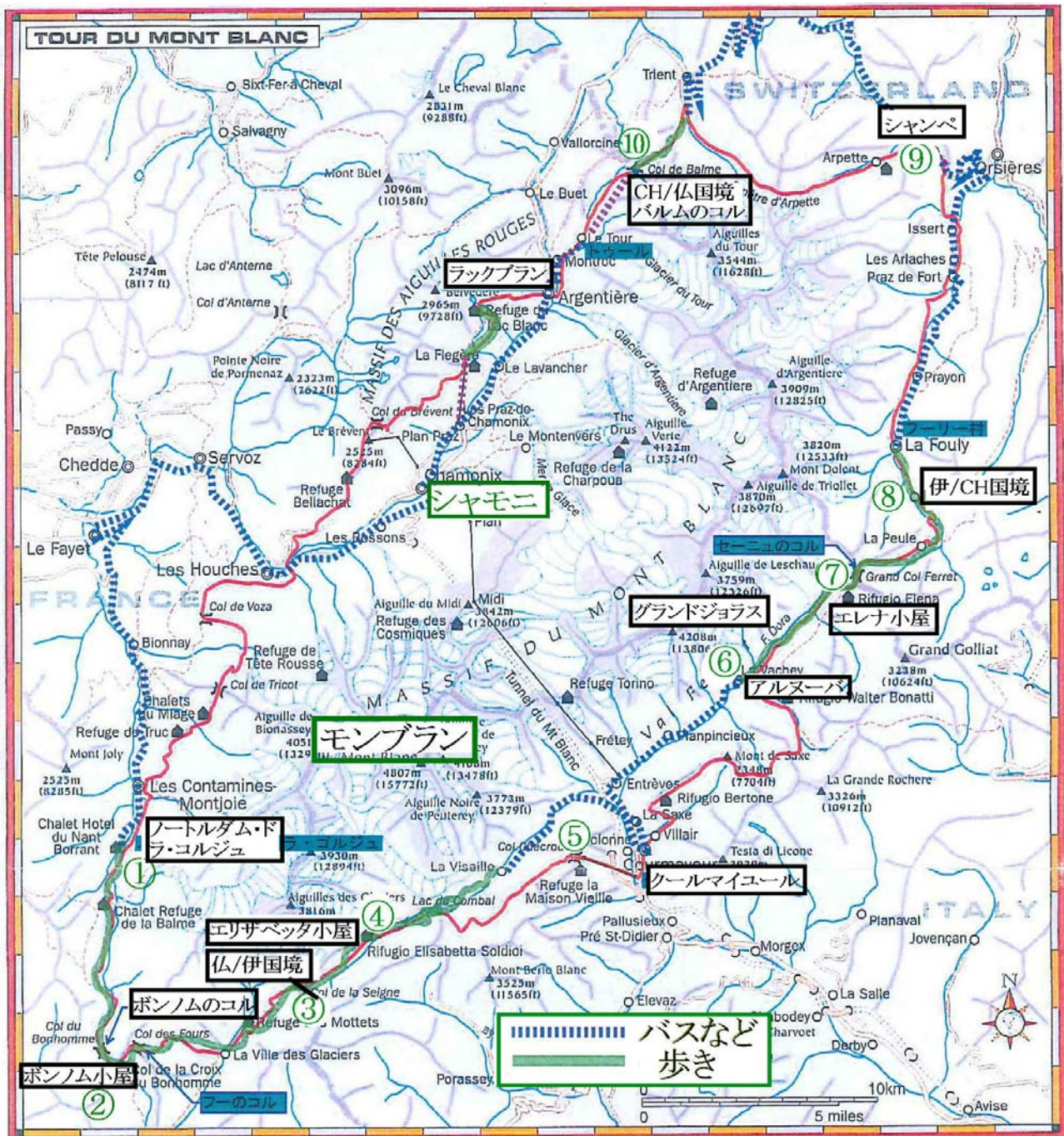


ツール・ド・モンブラン

アルパイン・ツアー ‘11年6月26日～7月1日



ヨーロッパ最高峰のモンブラン（4810.4m : MONT BLANC）をとり巻く山脈をグルッと1周しようというツアーである。ツール・ド・モンブラン（TOUR DU MONT BLANC）と名付けられている。

フランスのシャモニーが起点であり、終点になる。5日間かけて歩き通すわけであるが、すべて歩くわけではない。モンブランが見えないようなところはバスを使ってショートカットである。すべてを歩き通すと10日間は必要になるみたいだ。

オランダのアムステルダムで飛行機を乗り継いで、スイスのジュネーブでツアーリーダーのユーコさんに出迎えてもらう。ユーコさんは長野県出身で、現在はスイスに在住していて、このようなガイドを行って生計を立てている。お母さんからは、「早く日本に帰って結婚しなさい」、と言われ続けていると

の弁であるが、足が長くてスタイルのいい魅力的な女性である。

ジュネーブから1時間ほどバスに乗るとフランスのシャモニーに着く。この間、時計では10時間ほどの経過であるが、実際には時差を加えなければいけないので17時間くらいはかかったはずである。この間、オランダ・スイス・フランスを通過したわけであるが、アムステルダムで入国審査を受けた以外は国境通過の審査はない。これがユーロ圏のやり方らしい。眠いんだか何だかわからないうちにその日は終わり、翌日が来た。

大阪(2人)と名古屋(1人)からの人たちを含めて、この朝初めて15人全員(男4人・女11人:そのうち夫婦1組)が顔をそろえた。これにツアーリーダーのユーコさんとフランス人ガイドのマークも加わった。シャモニーのホテルの窓からはモンブランを見上げることができる。シャモニーの町は冬季オリンピックも行われた町なのではあるが、インターネット情報では、人口はわずか9086人である。

1. ラックブラン

初日は、シャモニーを中心に考えると、モンブランとは反対側の山脈に位置する、ラックブランへの足慣らしのためのハイキングで

ある。ラックブランは2382mに位置する山上の湖であるが、2385mまではケーブルカーとロープウェイで行けてしまうので、横移動するだけである。ロープウェイの整理係のお兄ちゃんに、「写真を撮っていいかい?」と聞くと、日本語で「いいですよ」と答えてきた。ツアーリーダーのユーコさんが教えてくれた。彼のお母さんは有名なガイドで、日本語もペラペラなのだそうである。その影響で、彼も日本語が堪能らしい。かつて、世界の観光地でアジア系の顔といたら、そのほとんどが日本人であった。しかし私の見たところでは最近では中国人が目立ち、韓国人と日本人はグッと少なくなってしまった。(ただしなぜか、今回はホテルなどでも日本人が多かった)ユーコさんの話でも日本人観光客の数は激減しているとのことである。土産物などで金離れのいい日本人を当て込んで、一生懸命日本語を覚えた人に申し訳ないような気





本場アルプスに行くジジ・ババ軍団



モンブランをバックに

がする。ネパールのカトマンズでも同じようなことを思った。

いよいよヨーロッパ・アルプスの第1歩を踏み出す。モンブランはもちろんのこと、北壁のロッククライミングで有名なグランドジョラスもよく見える。

今年は天候が良いので花が早いということである。今回も植物学博士がいっぱいいる。埼玉県出身の上影森さん・皆野さん（女）と熊谷さん（男）は同じ山岳会に所属する仲良しグループで、一様に花に詳しい。熊谷さんの話では、山岳会でモンブラン登頂を目指しており、今回はその下見らしい。女二人はたいしたパワーの持ち主で、初めて見る花に出会わずと、すぐにしゃがんでパチリ、次の瞬間には走って前との距離を詰める。青森の浜茄子さんご夫妻も地元の山岳会所属で、二人とも花に詳しく、同様の行動パターンである。まあ、花が好きな人にはこういったことを苦にしない人が多い。私はまっぴらでごめんある。「美しい景色は心の中に留め置くものよ」、なんて言っているからいつまでた



わすれな草



シオガマ



アルペン・ローゼの大群落

っても覚えない。この一帯のアルペン・ローゼの大群落は見ごたえがあった。

ラックブランは、登りのきつい部分はケーブルカーでカバーされてしまうところであるので、家族ずれのハイキングなどが多い。中には超ビキニのお姉ちゃんが、デイパックを担いで登っている。「目のやり場に困るよ」と言う人もいたが、「見てください」というやつを見ないのは失礼だよと、ジロジロ見た。二組出会ったが、両方とも彼氏付であったので、さすがに写真は撮り損ねた。日本の山ガールよ、どうせやるならあそこまでやってください。アルプスが位置するヨーロッパでは、年間を通すと日当たりのいい日が少ないからなのであろうか、太陽を求める意識がものすごく強いみたいだ。男も短パンで歩くのを当たり前前にしている。空にはパラグライダーもたくさん行き交っている。3 000m以上まで上がっているのではないかと思わせる。パラグライダーというのは、高いところから徐々に降りていくものだと思っていたら、ここでは上昇気流を捉まえるとぐんぐん上がって行く様がよく見える。この日の行程を終えると、まだ時間が早いのでシャモニーからケーブルカーで行けるミディ (3 842m) へ登ろうというオプシ



ラックブランの池



ミディのケーブルカー



ヨン案が提示された。富士山より高いところまでのケーブルカーがあるわけだ。ケーブルカーは反対側のイタリアのクールマイユールからも引かれており、ザイルで結び合ったグループもたくさん見かけた。

2. ツール・ド・モンブラン 第1日目

ノートルダム・ド・ラ・コルジュ (1 250m) までは車移動である。ここからいよいよツール・ド・モンブランのスタートである。いきなり牛さんがのうのうと寝そべる牧場の脇などを通りすぎる。

道は、牧場が点在して草原と森のアンサンブルというアルプス地方の田舎の風景を縫って走っている。強い日差しは遮るものがなく、歩いている我々を責めたてる。こんな中での昼食時に熊谷さん(男)が熱中症を訴えた。幸い昼食休みに日陰



アルプスの田舎道



ボンノムのコル(正面)を目指す

のある小屋で休んただけで体調はどうかに取り戻したようだ。この日の目的地のボンノム小屋は 2 433m であるので、1 167m の登りである。

ボンノムのコルを過ぎると傾斜は緩くなって、ここからボンノム小屋まではまたお花畑の世界である。この日の行程は 5 時間ということであったが、休憩を含めて 8 時間くらいはかかった。この日から小屋に着くと夕食の前までは、青森の浜茄子さんのご主人とビールを飲むのが恒例になった。この日のビールは味も色も濃厚なもので気に入ったが、京都から来たビール党の伏見さん(女)はお気にめさなかったとのこと。小屋は 3 段ベットであり、日本の山小屋よりゆっくりしているが、大差はない。



ボンノムの稜線

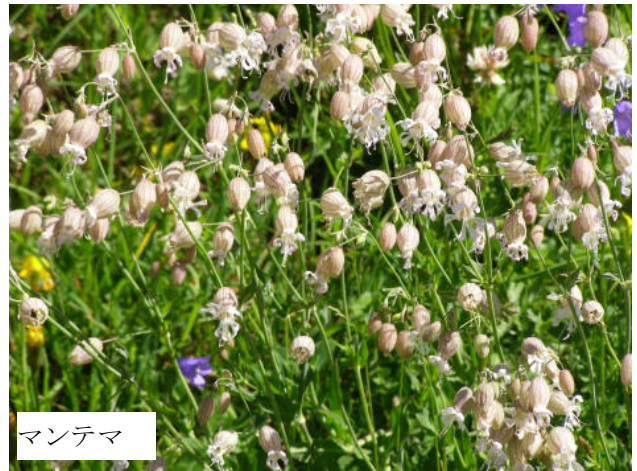


ボンノム小屋

3. ツール・ド・モンブラン 第2日目

フーの科尔 (2 665m : 今回の最高点) を超えてエリザベッタ小屋までの実働8時間の行程である。フーの科尔周辺は岩場であるが道ははっきりついているので怖いことはない。カモシカが数頭顔を見せてくれて我々を喜ばせる。静岡の菊川さんは、カモシカを見るのは初めてということで、感激していた。彼女は、今回のメンバーの中では一人で平均年齢を引き下げている





ということで、いつもほかの女性たちからからかわれていた。

ここから昼食をとるモッテ小屋までは、ゆるやかなグラシェ谷のお花畑の中をひたすら下る。

この日も底ぬけに天気がよく、神奈川さん（女）が熱中症になった。マークに荷物は委ねたが、なんとか歩き通したのはさすが山ババア。

セーニュのコル（2 516m）に登り返す。ここは仏／伊の国境である。国境といっても鉄条網があるわけではない。日本の県境ほど



の目印さえない。これがEUのやり方か？しかし第2次世界大戦の名残の戦闘用トーチカが散見される。

エリザベッタ小屋は結構込んでいたが、シャワー設備などは整っていてすごしやすい。しかしシャワーの位置が高すぎて、チビな俺には届かない。まったく毛頭野郎は！でもまあ、夕食前は浜茄子さんとまずビールである。これがあれば一切のわだかまりは消える。

4. ツール・ド・モンブラン 第3日目

2時間かけて350mほど下ってビセイユへ着き、バスを使ってクールマイユールへ行き昼食である。クールマイユールは、日本でいえば山岳都市の松本といったところか。シャモニーとはモンブランを挟んで対極にありトンネルで結ばれている。また、最初の日にケーブルカーで登ったミディ(3842m)へはクールマイユールからもケーブルカーでもつながれている。我々が行ったのは整然と整えられた新市街であったので、昼食前に時間が余ったので1時間ほどかけて旧市街の見学に行った。3月に熊野古道に行ったときには、市民生活を妨害されるといって岩や木に“反対文”を書きなぐっているのに出会ったが、ここでは行き会う人たちがフレンドリーに話しかけてくる。さすがイタリア人だ。

午後は再びバスで移動ののち、2時間ほど歩いてエレナ小屋へ。当然、浜茄子さんのご主人とビールで乾杯。埼玉の川越さん(女)を含めて缶ビール3本ずつほど飲んだ。何だか知らないが、我々の飲み方がすごく良かったということで、夕食時の全員の飲み代がタダになった。イタリアが好きになりそうだ。

5. ツール・ド・モンブラン 第4日目

今回はズーッと天気恵まれていたが、この日だけは悪かった。しかし早朝は雨に加えて風も強かったが、歩き始めたころはだいぶ収まってきた。伊/スイスの国境であるフィレのコルに着いたときはまだ寒かったので、いつものように高山植物も味わっている余裕がない。ここも国境といっても仕切り一つあるわけでもない。

ここでスイスに関する教養講座。スイスに行くとCHというイニシャルに出会うことが多い。これはラテン語の *Confœderatio Helvetica* (ヘルベディヤ(スイス)人の連合)の略で、インターネットのドメインも.CHである。公用語は、フランス語・イタリア語・ドイツ語・スイス固有語の4つある。以上は1998年8月にスイスアルプスのトレッキングに行った時の知識である。あの時は案外英語が通じなかった。私の下手な



エリザベッタ小屋からの遠景



グランドジョラス



フィレのコル

こと以上に、スイス人の英語に対する無関心を感じた。公用語が4つもあったら、それ以上の言語は見たくもなくなるであろう。

下りにかかってスイス側のフーリー村に下りたときには寒さはなくなっていた。この日の宿泊地シャンベまではバス移動である。シャンベは湖のあるリゾート地で、宿泊施設がいっぱいあったが、温泉のない宿屋というのは私的にはピンと来ない。



シャンベの観光街

6. ツール・ド・モンブラン 第5日目

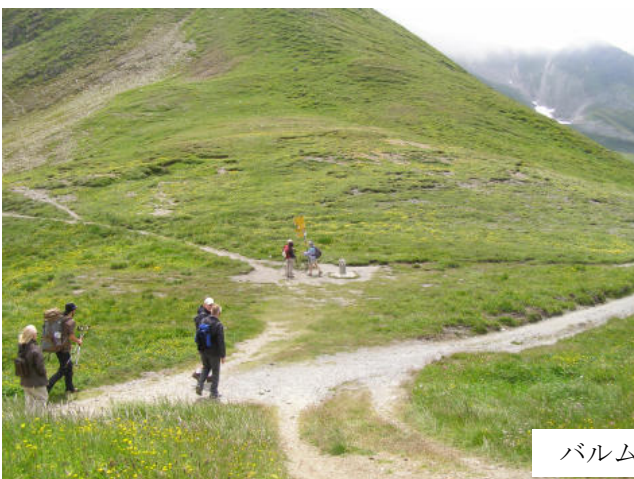


街角のマリア



街角の十字架

いよいよツール・ド・モンブランの最終日である。しばらくバスで移動して小さな村の街角からスタートである。十字路にはマリア様の像や十字架があって、ここがスイスであることを認識させてくれる。しかし登りにかかるとしばらくは樹林帯が続いて、まるで日本の山を登っているような感覚になる。スイス/仏の国境のバルムのコル(2891m)までは800mの登りである。稜線に出るといつものアルプスが戻ってきた。広々とした御花畑。ここには日本の多くの山では常識化している「高山植物保護」と称する木道などはない。みんな平気で高山植物の上を歩いている。日本の木道狂いは異常である。「植生保護」よりも「建設業者保護」のような気がする。登山道のつけ方もヨーロッパ・アルプスは人にやさしい。傾斜が緩やかである。山は修験者のものという感じがする日本の山の道とはだいぶ違う。だからヨ



バルムのコル



ヨーロッパ・アルプスではデブによく会う。デブは山になんか行くべきでないなどという常識はない。初日のラックブランのようにケーブルカーで行けるようなところでは、特によくデブに会った。みんなが楽しむべきことを楽しんでいる。こんなところにも成熟したヨーロッパ文化というものがあるのであるうか。



ユーコさんの話では、この日のマークのスタイルはヨーロッパ・アルプスにおけるガイドの正装であるということだ。最終日に合わせてこのスタイルで臨んだ、45歳になる陽気でサービス精神にあふれたマークの一面が覗かれた。

7. 帰国時のトラブル

シャモニーに下りたその日に土産物屋アサリをただけで、翌朝もうジュネーブ空港からアムステルダム経由で帰国である。ジュネーブ空港でちょっとしたトラブルがあった。団体でチェックインしようとしたら、各自による自動チェックイン機でしか受け付けられないという。まあ、コンピュータならお手の物よと思ってやってみた。パスポートをかざすだけで発券されるみたいだ。なんとか発券されたので一安心と荷物預けを待っている間に、チケットの確認をしたら、1枚目のジュネーブ～アムステルダムはよいのであるが、2枚目のアムステルダム～成田が全く違うチケットになっていた。関係ない外人さんの名前でもビジネスクラスになっている。発券機で私の前の人の方が外人さんであった。私の後から発券機に取り組んだ二人のメンバーの2枚目のチケットが一つずつずれて発券されていた。幸いジュネーブまではユーコさんがいてくれたので、なんとか切り抜けられたが、トランジェット時間の余裕も少なかったので、アムステルダムまで気が付かずに行ってしまったらと思うとゾッとする。ヨーロッパ人のプログラム能力はもう一つだなあ。